

# あたしと弱味と仮彼女

近衛龍一

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

二年生に進級した日の始業式。

文月学園Aクラス所属の木下優子は誰にも見られたくないものを学園一の完璧少年、水谷に見つけられてしまう。

どうしてもバラされたくない優子は、水谷の出した『俺の仮彼女になれ』という条件を受け入れる。

水谷の仮彼女として始まった優子の新学年の生活は一体どうなっていくのか……？

「えぐっ………どうしてあんたは……っ………あたしが泣いてるときに………ひぐっ………いつも側にいるのよお………」

「そこに泣いてるお前がいるからだろうが」

バカテスにはあまり見ない純愛系(?) 恋愛ストーリーーっ!!

# 目次

最悪な一日	1
絶対約束	5

## 最悪な一日

「あれ〜？ どこにやっちゃったのかしら……」

それは二年生に進級した始業式の日のこと。

あたし、木下優子は放課後、探し物をしていた。

「多分あるとすればこの辺りのはずなんだけど……」

必死になってとある探し物を探す。

普通であればまた明日にでも、となるのだが、今回ばかりは事情が違う。

それは見つければ今までに築き上げてきたものを一瞬にして崩すような代物。

命に代えても誰かに見つかるわけにはいかないのだ。

幸い、もうクラスの皆は帰っているので大丈夫。

どれだけ時間をかけても必ず見つけ出さなければ……

なんて考えながらふと時計を見ると時間は5時。

生徒が始業式に残っている時間ではない。

よし、ともう一度気合を入れ直して探し始めたその時だった。

ガラッ

教室の扉が開き、あたしは慌てて扉を振り向く。

「えつと……水谷君……だっかしら？ どうしたの……？」

そこに立っていたのは同じAクラスの生徒。

クラスが変わったばかりなのでクラスメイトを全員覚えているわけではないのだが、彼のことは嫌でも頭に入っていた。

成績優秀、容姿端麗。

今はやっていないみたいだけど、一年生の頃は野球部のエースで、運動神経も抜群という恵まれた超完璧な男子。

HRの時、Aクラスの女子の大半はみんな水谷君に釘付けだった。

だからこそ新しいクラスになったにも関わらず覚えていたのであり、今彼がここにいることが不思議なのだ。

「それは俺の台詞だ木下。お前こそこんな時間に何をしているんだ？」

「あ、えつと……ちよつと探し物を……」

「探し物か……」

顎に手を当て少し考え込む水谷君。

うん、この容姿ならあれだけ囃し立てられても仕方ないか。

なんてどうでもいい事を考えていると、水谷君はバックから一つの物を取り出して

言った。

「もしかして、お前の探してる物ってこれか？」

さつと取り出したものは男と男が抱き合っている絵が描かれている本。

あ、あれは……………！

「そ、それあた……………！」

『それあたしの！』と途中まで言ったところでハツとなる。

ま、まずい！

「ほう？ そうか。やっぱりこれは木下の物だったのか」

パラパラと本を捲りながら確認を取ってくる水谷君。

さ、最悪だ……………！

「まさか優等生の木下がこんなBL本を読んでいるとは驚きだな」

「……………っ！ か、返してよ……………」

「ん、いいぞ」

サツと差し出された本を素早く受け取って抱え込む。

さて、ここからどうしようか……………

「木下、このこと黙ってて欲しいか？」

「え……………？ いいの……………？」

「ああ、別にいいぞ」

た、助かった！

水谷君はいい人だ！

ホッと安心しているのも束の間、あたしはこのことをこの男に知られたことを後悔することになってしまった。

「ただし、条件がある」

「じよ、条件……？」

「俺の仮彼女になれ」

「え………？」

あたしの高校二年生の春は、最悪の一日から始まった。



## 絶対約束

翌日――

昨日見たばかりなのにやっぱりその大きさに驚かされてしまう広い教室に足を踏み入れると、もう既に何人か生徒が登校していた。

すぐに目に入ったのは他の男子を話しているムカつくあいつの姿。

そしてあたしが来たのに気がついたのかこちらを向いて、

「よ、木下。おはよ」

と平然と挨拶をしてきた。

営業スマイルでニコニコとしているが、目では『挨拶仕返せよ』と言っているのが分かる。

「おはよう水谷君」

仕方ないのでこちらも営業スマイルで挨拶を返すと、これ以上話しかけられない内に自分の席に行き鞆から学習用具を取り出して広げた。

「全く……急に挨拶なんてしたら怪しいじゃない……」

そう呟きながら浮かんできたのは、思い出すだけでもムカつく、あのやり取りだった。



「ちよつ……!!　それどういう意味よ!」

「そのままの意味だが?」

「なんであたしがあんたの仮彼女なんか……つ!!」

「それはお前の秘密を俺が握ってるからな」

「く……つ!!」

確かな事実にくうの音も出ないあたし。

待つて……水谷君があたしにそんなことを言うメリツトつて……?

「なんで……なんでそんなことを条件にするのよ。水谷君ほどの容姿ならあたしじゃなくとも沢山女の子が寄ってくるでしょ?」

「ん、まあ確かにな。だが俺はお前がいい」

「ど、どうしてよ……」

「お前は俺と同じ匂いがする」

「お、同じ匂い……?」

「どういう意味だろ……」

「そ。お前も俺も、仮面を被ってる。それもめちやくちや分厚い仮面をな」

「あ、あたしは別に……!」

「BL本持ってたやつが言える言葉じゃねえだろ」

「う………っ」

「だからよ、少しくらいは本性出していいこつかなあなんて思ってるから、その練習に」

「同じ仮面を被ってるあたしを練習台にしようってこと……?」

「そういうこと。理解が早くて助かる」

「………:仮彼女ってどのくらいなればいいのよ……」

「まあ2〜3ヶ月くらい?」

「……。本当に黙ってて貰えるんでしょうね……」

「もちろん。約束は守るぜ」

「だったら……その条件受ける……」

「よっしゃ。交渉成立な」

「で、でも皆には付き合ってるって言わないでよ!」

「まあ別にそれでもいいぞ」

こんなやつと付き合っているとか広められるなんてたまったもんじやない！

絶対にばれないようにしてやる！

「さて、それじゃ帰るとするかな。木下、一緒に帰るか？」

「……遠慮しておくわ」

「だろうな」

当たり前でしょうが。

いきなり人の弱味を握って仮彼女になれなんて言うやつなんかと誰が一緒に帰るかっつうの！

「まあどうでもいいけど木下。俺と二人きりのときだけは仮面被るの、禁止な」

「………なんでよ」

「なんでも、だ。どうせ今更隠したってしようがないだろうが」

「………そうね、分かったわ」

「それじゃあな木下」

☆☆☆☆

ああっつ！

イライラしてきたっ!!

なんであたしがあいつの実験台にならなきゃいけないのよ！

ムカムカする気持ちのせいで勉強にも手がつかない。

そんなことを思っていると、水谷君達の会話が聞こえてきた。

『おい陸、お前木下と仲いいのか？』

『何だよ急に』

『いや、今挨拶交わしただろうが』

『クラスメイトなんだから別に別に変じゃないだろ』

『それはそうだが、あの  
・  
・

木下に挨拶なんて出来ないぞ』

『あのとてなんだよ……』

『頭が良くて、運動神経もいい、リーダー性もあるし、何でも出来る、しかも綺麗。この学校の優等生と言えば木下優子とまで言われるほどだぜ？』

『へえ。そうだったのか。ま、どうでもいいけどな』

へ、へえ……

あたしの印象ってそんなにいいんだ……

最後の『どうでもいい』発言はムカつくけど、ちよつと嬉しいかも……

これも今まで優等生を演じてきたおかげね！

……今は水谷君にその努力を盾に脅されてるけど……

その後はHRが始まり、高橋先生がFクラスとDクラスの試召戦争のせいで午前の授業が自習になるという事を伝えて、そのまま午前の時間は過ぎていった。

Fクラスが勝ったみたいだけど、秀吉のやつ、新学期早々何してるのかしら……